

桑名を通る一般の旅行者は商用以外は東国からの伊勢参りの団体客が大半でした。彼らは熱田からの七里の渡しを利用せず、甚目寺、津島神社を参詣して佐屋から桑名への三里の渡しを利用することが多かったようです。

文政2 (1819) に奥州松山 (酒田市) から 19 人の一行が伊勢参宮した記録があります。3月23日に松山を出発し、新潟から北国街道、中山道を通り、名古屋から4月18日に津島神社を参詣し、佐屋から桑名に着いて、金井屋惣七方に泊まり、宿泊代150文払っています。桑名は「宿屋・茶店よし」と書いています。大福村、安永村を経て町屋川は板橋92間、土橋60間余、土橋90間(大小2本の橋が普通だが、この時は3本架かっていたのか?)を渡る。



町屋橋 (久波奈名所図会より)

この時は1本の橋です。

縄生村には一里塚あり。小向村で「したや」という茶屋で焼蛤を食べています。一つ2

文でした。柿村にも茶屋があります。朝明川を 75 間の土橋で渡っています。

伊勢参宮後は奈良、大坂、京都を回り、東海道を下って閏4月 10 日に桑名で泊まりました。宿屋は新発田屋七右衛門、宿泊代は 148 文。ここから熱田まで7里の船路。乗合船に乘りました。船賃 68 文ですが人数が少ないとて4文増額されました。さらに酒代として 16 文とられました。

武蔵国等々力村（現東京都世田谷区）の参宮一行 30 人の記録「伊勢参宮日記」では天保6（1835）年正月 10 日に等々力村を出発し、正月 20 日に鳴海・山城屋で泊まり、宿泊代 172 文。21 日熱田神宮、甚目寺、津島神社参詣して佐屋の美濃屋で泊まり、宿泊代 300 文。22 日に佐屋から 46 人乗りの舟を 1 貫 406 文で借り切り、祝儀を金 3 朱と 200 文払って桑名へ。桑名では堺屋三右衛門の昼食代が 30 人で金 2 分 2 朱（酒代とも）。この日は神戸で泊まり、伊勢参宮を済ませてから一部は奈良・京都へ。さらに一部は金毘羅詣をしています。

当時の貨幣は金・銀・銭の3種あり、変動相場だったので換算は難しいですが金 1 両を銭 4000 文として計算すると、1 人当たりで佐屋泊 300 文、船賃（祝儀とも）約 78 文、桑名での昼食代（酒代とも）約 83 文です。

宿泊代は東海道の宿場では 180 文くらいが相場であり、奈良でも 200 文なのに、佐屋での宿泊代 300 文は高すぎます。よほど高級な宿屋に泊まったのでしょうか。